

(論文)

日本統治末期の京城舞鶴公立高等女学校の校長と 内鮮一体の実態(2)

新井 淑子

キーワード

京城舞鶴公立高等女学校 海軍仕奉隊 長谷山利市
京城舞鶴公立高等女学校卒業生の進路 玉音放送の日

はじめに

筆者は、表題と同一論文(除(2))を国際コミュニケーション学会『国際経営・文化研究』(2011.3 Vol.15 No.2)に掲載され、そこで京城舞鶴公立高等女学校(以下舞鶴高女と略記)の1940年度開校の前後の高女入試状況、教育理念、教職員と生徒数、長谷山利市初代校長の国語教育や女子教育観、内鮮一体の具現化、可視化(学友制度、「日本式生活化」)等の実践、学徒戦時動員体制の取り組み等の実態を明らかにした。

本論では、1943年の秋同校に海軍が「内地人」の生徒募集に来校した際の生徒、校長、父兄聯盟の対応と決断等の経緯と顛末をみる。同校の進路の特徴を第1期生は京城府内公私立10高女と比較、第2期生は第1期生と比較する。1945年8月15日の学校、明暗を分けた敗戦後の日本の高女編入、復光後自らの民族に目覚めていく感動等をみていきたい。

1. 鎮海海軍仕奉隊への志願とその顛末

1943年11月、舞鶴高女では「鎮海海軍警備府附女子軍属」として朝鮮で最初に「貴校卒業生(内地人)」を採用したいと、同校に鎮海から海軍中將がきて講演を聞いた4年生「全員」が海軍々属に志願した。その直後40名の生徒が血書を認める事態がおきた。校長は、「内鮮共学を建学の精神とする舞鶴校としては、この差別的措置にはハタと当惑した」。海軍と「その後の折衝につれて、長谷山校長の教育信念と生徒愛の情熱は遂に海軍東京区を動かし『舞鶴高女卒業生に限る』という条件付きで「半島出身者」の採用が決定したのである。11月24日その旨校長は泣いて生徒に報告した。その後海軍の試験があり32名(含半島人5名)が合格し、軍属に採用されたのである。

1943年12月9日¹⁾に舞鶴高等女学校学父兄聯盟は、京城府民会館において小磯朝鮮「総督府閣下御臨場」²⁾のもとで「京城舞鶴高女海軍仕奉隊壮行会」³⁾を主催したのである。

舞鶴高女生達は翌1944年1月10日から「鎮海警備府」に「仕奉隊」として着任し、「卒業後は引き続き海軍々属」⁴⁾として勤務したのである。それらの経緯と長谷山校長の動向(校長批判の文書は未見)を雑誌「緑旗」⁵⁾を中心に、同校教員上田照子(現池田)氏と海軍々属になった卒業生たちの間

あらい よしこ：淑徳大学 国際コミュニケーション学部 人間環境学科 教授

き書きを交えて見ていきたい。

（1）海軍中将の「内地人」の海軍軍属要請と志願血書

舞鶴高女に鎮海から海軍中将がきて生徒に戦争の動向や軍属の仕事等について講演をした、その日の実態を上田照子（現池田）は以下のように執筆している。

「一期生が四年の十一月頃…南鮮の釜山の近くに鎮海々軍の施設部があり或る日そこから海軍中将の方が『海軍々属』となつて働いてもらいたいという要望をもって学校を訪れ、一期生は一室に集められ生々しい戦況について話されました。ところが中将の真剣な話に感受性の強い乙女達は、感激のあまり泣きわめき『私を行かせてください!!』⁶」と。

舞鶴高女生は、日々の学校生活で皇国女性の生き方や使命を教育されていたところに海軍軍属への応募の講演に、家族を思いはするが、皇国のために一身をなげうつつ覚悟でそこに志願した。当日軍属志願の血書を認めた生徒の日記は、それを如実に物がつたている。

「…私のやうな者でもよかつたら本当に全力を注いで働こうとすぐ決心した。田舎で私の卒業を待つて居る父母の顔がちらつくが、私はお父さんやお母さんの娘であると共に国の娘なのですと心の中で呼んだ。何時か先生がおっしゃったように、大東亜戦争は五百年戦争なのである。どうせ戦争中に死ぬる身なら、生ある中にお国の為うんと働きたい。どこで働いても変わりはないが、今度のこの事は本当に働き甲斐のあるお仕事だと思ふ。私は今度こそ『み民われ』の喜びをつよく感じた。『女としていざ今日こそは大君に捧げまつらむこの血とこの肉』これが今の私の心である、と⁷。

また講演を聞き鎮海に軍属に採用された当時の生徒は、「私達はみんな軍国少女だったから」「海軍の7つボタンの将校が格好良くて」「海軍中将が格好良くて」海軍に憧れ女性でも皇国のために役に立てることに感激した、という⁸。

その結果、4年生「百二十四名」のうち血書した40名が海軍々属志願となつたのである。講演後の生徒達の動向を次のように総督府編修官島田牛稚は述べている。

「昼下がり校長室に校長を取巻いて鎮海志願の決意を述べた。しかも其の後のもの五分もたため中、再び校長室に駆け込んだ四十名は、志願の血書を校長の机の上に積んだ。それには『一死殉国』『女トテイザ（ママ）今日コソハ大君ニ捧ゲマツラン、コノ血コノ肉』『学友ト共ニ我行カン』なども文句が鮮血淋漓認めてあつた、と⁹。

これらの一連の行為を長谷山と教職員はどのようにみていたのであろうか。

（2）長谷山校長「採用条件」を海軍と交渉—「内地人」を「日本人」に—

生徒達の海軍々属への熱烈な志願行為を長谷山校長は、「胸中灼熱<極熱?>して沈黙静坐、たゞ教え子たちを凝視するのみであつた」。しかし4年生全員が軍属志願し、採用者は内地人という海軍の採用方針と内鮮一体の教育方針との乖離が問題である¹⁰。そこで長谷山は、教職員と話し合い海軍々属に志願は「家庭が許すならば応じる」方針を決定した。しかし海軍々属の採用条件は、「内地人の子に限る」とある。そこで校長は舞鶴高女は内鮮一体の教育方針で育てて来たので「希望者は内鮮を問わず」¹¹でなければ出せないと考えた。さらに長谷山は、生徒達の「至情を其の儘私するに忍びずとなし、早速」総督府学務課の「許可」を得て、「鎮海」の海軍に出向き「乙女の赤誠を訴え」¹²、肝心の採用条件「内地人に限る」とある規則について、長谷山は次のように断言したのである。

「内鮮一つ、共に陛下の赤子として皇国女性の道をひたすら歩みつゞけて来た舞鶴高女としては、先生も生徒もこの鉄則の前にたとえようもないかなしさを感じた…。『内地人』を『日本人』と訂正して頂かない限り、舞鶴からは一人もお送り出来ません」ときっぱり応えた長谷山校長のことばに

海軍当局は今更のように、舞鶴高女を注目した。

海軍では「色々と調査や協議の上」¹³、長谷山と教職員の決定通り内鮮一体の教育の実践を認め「内地人」のみの採用条件を撤回し「日本人」としたのである。

その文書に関連したものを舞鶴高等女学校学父兄聯盟理事である津島武信は「学父兄聯盟役員」宛に「長谷山校長の報告」として、「鎮海海軍部から新卒業生の採用について学校の教育的立場と、生徒達の誠意が容れられて、内鮮の区別なく、而も、条件に叶う限り無制限に採用してもよい、との回答があった」¹⁴と報告している。

(3) 京城舞鶴高女海軍仕奉隊壮行会

1943年12月9日、京城府民館大講堂において舞鶴高等女学校学父兄聯盟主催で32名の京城舞鶴高女海軍仕奉隊壮行会¹⁵（以下壮行会と略記）が「盛大に挙行」¹⁶された。

当日仕奉隊員の高女生は、「モンペ姿」の「制服の胸に赤いリボンをつけ、きりっと」していても「やわらかい花の蕾のような感じ」であった。

その生徒の決意表明や来賓の挨拶読み取った式次第を中心に主催者や参加者の文章を抜粋して以下に紹介したい。

まず、式次第は、第一部と第二部構成である。第一部は午後2時～3時まで儀式中心である。第二部は、舞鶴高女の在校生を中心に日頃の舞踊や歌等の活動を披露し、舞鶴高女の五省を唱えて午後4時に終了している。当日のそれらを順に概観したい。

第一部の「開会の辞」は津田興一、「父兄代表」は「勇んで征け！」と激励した。続いて海軍仕奉隊員となる「三谷美智枝」と「金岡春姫」の決意表明である。日本人の「三谷美智枝」は血書日の日記を朗読したが、その中には「をみなとていざ今日こそは大君に さゝげまつらんこの血、この肉」と。金岡春姫は、軍属に反対する母親を「本当の日本人にするのは、私が鎮海に行くこと」と考えた末の「応募」であったと告白したのである。来賓の祝辞は、小磯朝鮮「総督府閣下」、「京城道知事閣下」の祝辞の後「長屋軍報道部長閣下」は、「あなた方の勤労が第二のハワイ奇襲となり、第十次第二十次のギルバート沖海戦につながる事を思ひ、今から期待する」と述べ、「松本海軍大佐殿」は、「今戦争は九合目…あと一合目をうんとがんばらねばならぬ。この大切な時にあたり、あなた方の力はきつと少年航空兵の胸にもひゞき、又目覚めぬ半島青年たちにも立派な心の糧となるであらう」と激励した。次に「韓国民総力朝鮮聯盟事務総長」の祝辞、「緑旗聯盟婦人部須江愛子」の同士としての女性として「就労後の注意」があった。

最後に長谷山校長は「自分の教え子が今こゝでうけている光栄を考える時たゞ感激あるのみ、行く者に対しては今更何もいふ事はない。日頃教えた『勤労は勤皇なり』という舞鶴魂をもって行け、そして決して汚すな。後にこの私たちは軍教刷新の叫ばれる朝鮮教育界に於て、真に教育に挺身する一兵卒として突進する事によって今日のこの光栄に報いたい」との謝辞と決意を述べたのである。

第二部は、「在校生の美しい朗詠やみやびやかな大和舞、『征くぞ我等も』の合唱」があった¹⁷。また、「緑旗」の婦人部が高女卒業生を組織していた「清和女塾」¹⁸も壮行会に列席し、舞鶴高女生の海軍志願を讀え詳細に当日の模様を『緑旗』に掲載したのである。

3

(4) 鎮海海軍での舞鶴高女生

1944年1月10日、京城を出発した32名は何人かの親が鎮海の手海軍施設部に送ってきたほど大切に育てられた生徒達であった。その生徒たちが無事に同施設部の女子宿舎に到着したのである。宿舎では一室に2～3名が割り当てられた。施設部には他に一般徴用の男子宿舎もあった。

高女生達の宿舍では、賄いのお爺さんが朝、夕の食事は勿論、昼のお弁当もつくってくれ各自がそれを職場に持参した。労働時間は8時半から17時まで。海軍では、全員が事務の仕事で人事部、庶務部、設計部、経理部等の人事係、労務係、庶務係、給与係、食料の配給等様々であった。なかには軍の機密に関わる職種もあった。一つの部署に2人～3位が配属されていた。鎮海での高女生達は、宿舍と各仕事場を往復するのみで外に遊びに行くこともなかった。宿舍では、お風呂に入る時間も決まっていた¹⁹。

舞鶴高女では、3学期に鎮海に送り出した32名の生徒達を長谷山は、心配したのであろう、上田教諭を鎮海に派遣し、そこでの仕事や生活等を視察させていたのである。上田は生徒達が何の問題もおこさず仕事に励む様子を校長に報告している²⁰。

鎮海に行った高女生達は、1944年3月の卒業式には舞鶴高女に戻り式典に参列して卒業証書が授与されている。高女不在で鎮海で海軍の事務をとり給与もあり、3学期の学習はしていないのにも拘わらず、通信簿には成績が記入されていた。「どういう風に成績をつけたのか」生徒達は「不思議に思った」。

高女卒業後は、正式に海軍軍属として鎮海に戻って各自が引続き勤務をしたのである。なお、その後卒業生は鎮海から京城に戻り総督府に転職した卒業生もいた²¹が、敗戦まで勤務した卒業生は、希望すれば鎮海から日本に引き揚げることができたが、京城の家族の元に戻り家族と共に12月に帰国した卒業生がいる²²。

（5）海軍仕奉隊とその壮行会への批判

舞鶴高等女学校学父兄聯盟理事の津島武信は、壮行会の批判があるなかで実施したことを具体的に次のように述べている。

父兄主催の壮行会を主催する「事情のよく判って居ない方面からは、一女学校の壮行会としてが大袈裟だとか、或る町総代が『あれは勤めに行くので第一戦に行くのではないので』などといって失笑を買ったりなどした程のこともあるのですが、時と共に、心ある人々から、その意義が声声深く取り扱は、各方面の賛辞を受けていることは、朝鮮の為に誠に有り難い次第だと思って居ります。」「壮行会について『父兄が熱心だ相です』などの批評は心外の一つでもあった。確かに熱心ではある」。

舞鶴高等女学校学父兄聯盟は、壮行会が「大袈裟」「父兄が熱心だ相です」等という批判があるなかで、軍属に志願した生徒達が「内鮮相携へ、この機密関係に於ける内鮮区別撤廃の恩沢に感激し、努力して、不易の大道たらしむる先駆者たるの榮譽を護りつゞけ様と誓っております。」

壮行会で「神宮への御禮言上の参拝」を入れるのは、「半島側の父兄」から「提案」され、それを「内地側の父兄も…応え」て実施したのである。壮行会を開催し軍属に志願した生徒達が「内鮮相携へ、この機密関係に於ける内鮮区別撤廃の恩沢に感激し、努力して、不易の大道たらしむる先駆者たるの榮譽を護りつゞけ様と誓っております。」²³

4 しかし、そのことが長谷山校長への賛否両論となり、既述の同論文（国際コミュニケーション学会『国際経営・文化研究』2011.3 Vol.15 No.2）の通り長谷山は、1944年4月1日には「左遷」²⁴され、平壤府の「平南道視学官」²⁵に転出し、舞鶴の内鮮一体の4年間の教育は終焉した。後任の校長は、京城師範学校教頭の犬丸勝良である。

2. 決戦期の卒業生の進路

戦争の激化に伴い女性の労働力を必要とし1944年10月には、女子挺身隊が制度化され卒業生の既

婚者や上級学校への進学者を除き、何らかの仕事に就労せざるを得ない。このような状況の中で舞鶴高女の第1期生138名が、1944年3月に卒業した。同年の京城府内の公私立高女10校の卒業生の進路と舞鶴高女を比較して、同校の特徴を見たい。

次に同年の舞鶴高女生の進路と翌45年3月卒の同校第2期生のそれらを比較し具体的な進路や生徒の意識等を見る。

まず、1944年3月卒の京城府内の公私立10高女の卒業生総数は1,669名である。その内訳は京城第一公立高女（196名、以下京城第一と略記）、京城第二公立高女（209名、以下京城第二と略記）、京畿公立高女（167名、以下京畿と略記）、舞鶴（138名）、淑明（164名）、進明（107名）、梨花（177名）、啓花（111名）、同徳（173名）、竜谷（227名）高女である²⁶。

以下既述の公私立高女卒業生の進路は、「京城府内女学校以上卒業者状況表」「上級学校進学」「官公署」「銀行・会社・商店」「工場関係」「看護婦」「その他」と「家庭」を数量的にみて、それらと舞鶴高女を比較して同校の特徴を類推したい。

（1）舞鶴高女の第1期生と第2期生の進路

まず、1944年3月の舞鶴高女の第1期の卒業生138名の進路は、上級学校への進学者は23名（16.7%）であり、就職者111名（80.4%）、進学も就職もしないで「家庭」に入ったのは4名（2.9%）である。就職先等は「官公署」が最も多く77名（55.8%）、「銀行・会社・商店」に30名（21.7%）、「看護婦」4名（2.9%）である。

表1 1944・45年度の舞鶴高女の進路

年 度	卒業生数	上級学校 進 学	官 公 庁	銀行・会社 ・商店	工業関係	看 護 婦	そ の 他	家 庭
1944	138名	23名	77名	30名	0名	4名	0名	4名
進路比率	100%	16.67%	55.80%	21.73%	0%	2.90%	0%	2.90%
1945	147名	56名	36名	44名	0名	5名	※5名	1名
進路比率	100%	38.10%	24.49%	29.93%	0%	3.40%	3.40%	0.68%

「その他」の※5名は、教員となる者。

「上級学校進学」率を既述の府内公私立10高女の最高は、京城第一高女の31.6%（62名）であり、最低は同徳高女の5.7%（10名）であるが、平均は19.9%（1,669名中333名）である。他に進学率の高いのは梨花高女（29.9%）、淑明校女（28%）竜谷高女（25.1%）舞鶴高女（16.7%）であるが、舞鶴高女は平均の進学率より3.2%低くなっている。

「官公署」は女子専門学校卒業生を採用し、不足分を高女で補充したようである。同年には梨花女子専門学校の卒業生全員（343名）と淑明女子専門学校の193名卒中の91.2%（174名）が就職したのである。それらに次ぐ就職率は舞鶴高女である。京城府内の10高女の「官公署」への就職率は平均は、22.9%である。京畿・舞鶴・京城第一・京城第二公立高女4校のうち最も高い舞鶴は55.8%であり、低いのは京城第二高女の22%（209名卒中4名）であるが、その4校の平均は35.2%である。舞鶴はその平均より20.6%も高いのが特徴である。「官公署」への就職率が高いのは私立の淑明39.6%（164名中65名）、公立の京畿35.3%の59名（167名卒）、京城第一高女27.6%（196名卒中54名）である。

「銀行・会社・商店」への就職は京城市内の既述の公立高女3校より低い。

京城府内10高女のうち6高女は「看護婦」にならないが、舞鶴は4名（2.9%）になっている。京城

市内の京城第一高女と龍谷高女は各2名、京城第二高女は1名と少ない。舞鶴高女の内鮮一体の教育と日本人が主体の高女が看護婦を希望していたのである。

「その他」の仕事は教員である。既述の統計では舞鶴高女は教員はいない。私立の梨花高女は30.5%（54名）、同徳高女は28.3%（49名）進明高女は20.5%（22名）、龍谷高女は6.2%（14名）、京城第一高女が1.5%（3名）である。私立高女卒の教員が多いのは、同民族の需要と関係していたであろう。

「家庭」に入る卒業生の率は、府内高女10校のうち最も高い啓花高女の49名（44.4%）、少ないのは梨花高女の1名（0.6%）であるが、平均すると10.9%（卒業生1,669名中182名）である²⁷。

（2）舞鶴高女第2期卒業生の進路

1945年3月10日の第2期舞鶴高女の卒業生は147名である。当日の卒業式では、同式次第と卒業生全員の氏名、進路先名、本籍が記入された一覧を参加者に配布した。その用紙には生徒の氏名は、内鮮一体の高女故に改姓名されている。その出身地や氏名から民族別の類推は可能であるが、その正確さが保障されないおそれもあるが民族別の数を敢えて使用する。その基準は、本籍とした。本籍の欄は、日本国内の府県名は日本人と見なし、「京畿」「咸南」「咸北」「全南」「全北」「仲南」「中北」「全甫？（不鮮明なコピー）南」「平北」「平南」と記入された者は朝鮮人と見なして、進路の特徴をみる。

まず、「上級学校進学」者は56名となり、1期生138名の卒業生中23名で16.67%であったが、2期生は38.10%を占め、1期生の2.43倍に急増した。56名の内訳は教員養成系の学校へ25名（17%）、「女子専門学校」へ31名が進学者である。教員養成系は「京畿女子師範学校」へ22（日本人9、朝鮮人11、以下日、朝と略記）名、臨時教員養成所（「平南臨時教員養成所」等）に朝鮮人3名が進学者である。「女子専門学校」（以下女専と略記）は31名で卒業生の21.09%を占めている。女専の内訳は日本人が「内地女専」へ1名、朝鮮人が「京城女専」に20名、「京城女医専」に5（日1、朝4）名である²⁸。

女専等への進学は朝鮮人が圧倒的に多く、日本人は、朝鮮にある女子師範学校を目指している。日本の専門学校進学者は、姉も日本の専門学校を卒業していた²⁹。

女子で高等教育を受けるのは、日本も朝鮮も少なかった。朝鮮では、「1950年」の「六.二五まえに」高等教育を受けるのは、「非常に裕福で開明的な家でない限り、女性を大学に通わせることは田舎ではとても珍しかった」³⁰。舞鶴高女の朝鮮の親たちは、既述の本籍からもわかるように京畿は多いが、広範囲から内鮮一体の教育に共鳴した開明的な親たちが多いのは既述（前掲『国際経営・文化研究』）の通り、それらを裏付けている。

なお、1945年度の京城府の高女の進路統計は未見であるが、既述の1944年度の進学率が最高の京城第一高女の31.6%を舞鶴の第2期生は超えて、38.1%と増加したのである。

- 6 舞鶴の「官公署」をみると第1期生は77名（55.8%）、2期生は45名（30.6%）と激減している。第1期生は既述の通り鎮海の海軍に32名（日27、朝5）官公署の項目に含まれているが、第2期生も同様である。第2期生の45名の内訳は軍関係を除いた総督府等官公庁には、12（日朝各6）名、軍関係は24名はすべて日本人である。軍関係は「鎮海警備府」10名となり前年度より22名減少した。しかし新たに軍関係が5箇所拡大され14（「陸軍倉庫」1、仁川造兵廠）7、「海軍武官府」3、「軍司令部」2、「大刀洗飛行学校太田派遣隊」1）名が採用された。そのことは前年度に舞鶴への軍派遣の批判を考えると他高女は軍勤務はいなかったのであろうか、1期生の勤務が評価されたのか、単に人材不足の補充のためか不明であるが、1945年度は他の高女との比較はできないが、軍関係箇

所の拡大は第2期生の特徴となろう。鎮海の軍勤務の良否は別として、朝鮮人の高女生が軍に応募したか否かも不明ではあるが、軍が望んだ「内地人」のみの採用となったのも特徴である。「日本人」の採用の良否は別として、それが「内地人」採用に戻ったのは、犬山校長に代わったことを反映したのであろう。長谷山自身の「情熱」的な教育者の一念が軍の方針を変更させたことが、前述の「1」の通り裏付けられたのである。

「銀行、会社、商店」には44名(29.93%)が採用されている。「銀行」は17(日5朝12)名(11.6%)、会社は27(日18朝8不明1)名(21.1%)である。前年度は「銀行・会社・商店」で30名(21.7%)採用されたが、第2期生は商店への就職者はいないが、「官公庁」が減少し「銀行」や「会社」が増加したのであろう。また、第1、2期の卒業生共に「工場関係」への就職者はいない。銀行は日本人が多く会社は朝鮮人が多く採用された。

「看護婦」と「その他」は各5名(3.40%)である。看護婦は、「日赤本部」3(日3)名、「日赤看護婦」2(日1朝1)名である³¹。女性でも国家のために尽くすという高邁な使命感をもつ看護婦希望者は、京都市の「日本赤十字病院」の「看護婦募集」に応募し、「数学と作文の学科試験」を受ける。しかし、看護婦になるには「身長150センチ以上、体重42キロ以上の条件」があったのである³²。

「その他」は、5(日1朝4)名(3.4%)の教員であるが、朝鮮総督府の教員検定試験を受けて合格した卒業生の勤務先の加平国民学校等が記されている。

同年の「家庭」に入る日本人の生徒1名は「病弱ノタメ家事ニ就クモノ」と但し書きがある。前年度は4名(2.9%)が家庭に入ったが、その後既述の通り女子挺身隊が制度化されたことを反映した但し書きと思われる³³。

なお、第2期生は決戦下の高女時代の希望を戦後・復光後に叶えている例がある。看護婦希望が「38キロ」の軽体重のため、父親の関係で「勤労動員援護会」に勤務し、引き上げ後銀行員となったが、これから「アメリカ式のナースを作る」ことを聞き、「国立金沢病院附属高等看護学校」を受験して合格し、同校第1期生として1947年9月に入学、50年4月に卒業して、看護婦と助産婦の資格もとり活躍していた日本人がいた³⁴。

また、決戦期のため学校に行っても勉強はできないので、高女教員の斡旋で銀行に一端就職したが、復光後淑明専門学校で学び、卒業後小学校の教師として活躍した人もいる³⁵。

3. 玉音放送前後

(1) 玉音放送の前の日本人卒業生の生活

朝鮮での生活は、戦禍が厳しくなると物資が統制されたがその生活を見る。卒業生は「大家族で普通の標準的な生活」(筆者には「標準的な生活」は定かでない)であった。「高女時代は父が高級官吏(東大卒)で…進物用が多くて裕福で不自由はし」なかった。生活にゆとりがあり卒業と同時に「朝鮮総督府学務課に就職してから戦況が激しくなり、配給制度になり質素な生活をした」。また、京城女子師範学校を卒業後教員になった卒業生は「米は配給制で1日2合5勺でそれも雑穀が混じっていた。甘い物も並んで買うこともあった」が、物資は「だんだんなくなった」。家庭では「燈火管制で電灯に黒い覆いをして」生活し、「防空壕を掘って万一に備え」た暮らしをしていた³⁶。

このような日常を8月15日の玉音放送は大きく転換した。日本はポツダム宣言を受託し敗戦となり、日本人は母国に引き上げたのである。朝鮮は36年間の日本統治から開放されて歓喜となる。「日本の統治は完全に終了」したのは、「1945年9月9日」³⁷であった。

（2）玉音放送の日

玉音放送の当日を生徒たちはどのように迎えたのか。8月15日は舞鶴高女は「学校の召集」日であり、夏休み前の期末試験が終わった。「大事なことがあるので教室で待っているように」と指示された生徒達は教室で待機していた。1年生の「ある生徒」が待機時間が長いので見に行くと「職員室で先生達が泣いていた、というので只事でないことがわかった」。教室に戻った「教員が戦争に負けたこと、日本人は在学証明書を8月何（？）日に取りに来るように」といった。当日、帰宅するため普段通り「往十里まで歩きそこから汽車に乗ろうとしたら、日本人だから駄目と汽車に乗せてくれなかったの、歩いて帰宅した」のである。このとき「はじめて敗戦の惨めさを実感した」のである³⁸。

1945年3月舞鶴高女卒業の第2期生は、京城で広島県立女子専門学校（以下広島女専と略記）の試験があり合格し、「就学手続」も完了していた。しかし釜山と下関の連絡船が魚雷にあうため運航を待つ間は、舞鶴高女で助手の様な仕事をして待機していた。その期間が長引き、淑明女子専門学校に転出を決めた。同校の面接日の8月15日は、卒業生の母親が亡くなった一週間後であり父親が同道した。「面接が終了し同校の応接室で待機中、生徒はみな講堂に集められ、学校は震撼とした変な雰囲気が漂って」いた。「応接室に流れて来た玉音放送」が「聞きにくくて何がなんだか分からないまゝ」「お引き取りください」と言われ、「帰路につきましたが、電車の中の混乱、日本人である事の身の不安を感じ、どのようにして家に帰り着いたか、只々呆然としていました」。その卒業生は帰国後1年遅れて広島女専の生活科に入学し、49年3月に同校を卒業して高等学校³⁹の数少ない女教師となり、現在も還暦すぎた男子の教え子にも生き方等を導いてくれた教師として全幅の信頼を得ている。また、現在一市民として地域の文化活動や留学生の支援等の国際交流等を継続中である。

4. 敗戦直後の生徒

舞鶴高女の在校生は、8月の指定された日に在学証明書を取りに行くと、通信簿はなく在学証明書を貰ったのである。その日、「上級生達は引き上げ後の住所を交換していたが、1年生達はまだ若かった」⁴⁰ので、それも出来なかった。京城を9月に出発して親の郷里等に到着するのに1ヵ月以上かかり、生活が激変するなかで、高女教育の継続を追究していく。また、日本の高女で朝鮮の教育が正当に評価されない事例もあるが、それらを乗り越えて成長していたのである。

（1）親の死で生活の主体者に

「引揚げは自分で持てるだけの荷物と1人1000円だけ」で生活資金は持参できない。「それも何度も盗難にあい、筍生活が続いた、知人の紹介でするめを鉄道弘済会に出すような仕事もした。買い出しを何回も経験した。そのかわら洋裁学校に2年近く行って資格取得した。昭和23（1948）年より教職に復帰できた」卒業生もいたのである。

しかし学習半ばの在校生は、京城を出発して1ヵ月以上かかって日本に引き揚げたが、戦後の生活は「非常にみじめな生活」で「戦前と戦後は天と地」の違だった。「母の実家に引揚げてきたが住む家がなく、小屋を叔父の家の庭に建てて、母子5人の生活、26年（1951年）に母が死去し私は」「引揚げ後、…中途入学（編入）した都立高女も退学し、生活のためにすぐ職業につき学業は0です」⁴¹と記している。

（2）戦後の教育改革に直面した3年生

高女を日本で継続するために様々な苦難がありそれらを乗り越えて、戦後の新制度と旧制度を利

用して、年数が短縮されて見事に旧制の高等教育を卒業した在校生がいた。

3年生で敗戦になり京城から長崎県に1946年1月に引揚げてきた。46年4月には従姉妹たちが通っていた「長崎県立諫早高等女学校に編入」した。同校では「朝鮮(外地)からの引揚げの生徒」ということで「3年生ではなく1学年下げて2年生に編入」させたのである。ところが1948年度に新制高等学校が発足した。そのために高等女学校の制度がなくなったが、高女4年で卒業する道は保障されていたのである。しかし高女卒業を選択しないで、旧制の諫早高女と諫早中学校が、「新制諫早高等学校」となった同校の「普通科の2年生」になったのである。普通科には「各クラス4～5名の女子がいた」。同校在学中に「新制大学受験資格試験」の制度ができたので、それを受験して見事に「合格」したので、新制大学で学ぶことを考えた。しかし、住居が「前の家からの類焼で全焼」したために「新制大学は断念して、「旧制の3年制の専門学校を受験して合格した」のである。そこで「専門学校の2年生に横滑りして、1年間学んだのち専門学校を卒業」⁴²している。

(3) 朝鮮の高女生の復光

自国の民族の自覚や母語に目覚め新鮮な感覚でそれらを吸収し、自国の歴史を学ぶ中で感動し「我が国、我が祖国という愛着心」と民族の自立を思い自己を成長させていった、その喜びをパク・ギチンは次のように綴っているが、その一部を紹介したい。

「3年生の夏休みに歴史的な8.15解放を迎えた。ただの一人の先生とも、挨拶も交わずに、日本人の先生達はばらばら日本に帰国し、私達は車士伯女性校長、韓国人先生そして完全な我が韓国語で勉強を習い始めた。…初めて習うハングル国語、また正しく習う英語時間、我が言葉で行う音楽の時間、私には感激時代であった」。 (略)

「結局、我が言葉、我が字で、歴史的転換期の中、舞鶴の生活は私に大きな意味をくれた。我が言葉の奥深い美しさ、そして盲目のように暗かった我が国の歴史を習いながら驚異と感動に胸がいっぱいであった。遅いながらも我が国、我が祖国という愛着心と胸いっぱいの感動にそまっていた。

そして、どんなに我が民族が虐待され、その醜い歳月を耐えてきたかという、先人に対して感謝を込めるようになった」⁴³、と。

おわりに

長谷山利市校長は海軍の「内地人」のみ採用の条件に決然と立ち向かった。まず総督府学務課の承認を得て鎮海の海軍に出向き、「内地人」から「日本人」へと変更させた。長谷山が海軍に刃向かったのは以下の3点があると思われる。海軍を希望する朝鮮籍の生徒の存在である。次に日朝生徒の学友制を基盤とした内鮮一体の教育は、民族「差別がなかった」と韓国の卒業生⁴⁴が証言するが、長谷山も生徒を「日本人」として育てている自負もあろう。最後に既述(『国際経営・文化研究』2011.3)の通り総督府学務課員の植民地の中等国語教育の内容の座談会での提言を、国語教師の立場から反旗を翻したが、自らの信念を貫き通す強固な正義感であろう。海軍は長谷山の真摯な言動を受け入れ、長谷山の舞鶴高女のみ、と条件付で承諾した。それと32名の海軍仕奉隊⁴⁵を讃え、同校父兄聯盟は壮行会に総督も参加して開催した。それらの賛否両論は長谷山の左遷で終了した。

それは次年度の軍部の勤務地は拡大したが、鎮海の海軍も三分の一に減少し、採用者全員が「内地人」となったのである。また、同校の教員全てが海軍行きを讃えたわけではない。犬丸勝良校長に替わった1944年度の担任(「体育の玉木先生」)は、ある生徒に「海軍にはいくな」⁴⁶と話しかけたのである。このような雰囲気は第2代の犬丸勝良校長が同校の内鮮一体は継承し、初代の校長への批判を活かした結果であろうか。犬丸は教員を何人かつれて着任し、長谷山時代の中心的な教員の

活用が消極的であったようである⁴⁷。それは軍国主義の教育にリベラルなものを加味したのであろうか。戦時下の精神修養が軽減されたのか、進学者の急激な増加へと繋がったのであろう。生徒の見た校長の特徴や生徒に及ぼした影響等も次回の課題である。

敗戦直後高女生達は、日本に引き揚げ過酷な生活を乗り越え、新たな高女の生活や仕事を開始したが、それは同時に朝鮮の復光である。自国の教師から言語、伝統文化歴史等を学び、日本の36年間の民族支配とその復光に目覚めた舞鶴高女の卒業生や在校生たちは、日本の同窓生や教師を現在どう見ているのかも亦次回の課題としたい。

注

1. 島田牛稚「舞鶴高女の海軍仕奉隊に見る 決戦下の女子教育」『緑旗』第9巻第2号 通巻第96号 1944年2月 復刻版『緑旗 15（1944年1月～1944年6月）』オークラ情報サービス株式会社 2009年6月 152頁
2. 津島武信「真に感激に堪えない」『緑旗』同上 160頁
3. 津田美代子「舞鶴をとめ出陣—京城舞鶴高女海軍仕奉隊壮行会—」1に同じ 158頁
4. 島田牛稚「舞鶴高女の海軍仕奉隊に見る 決戦下の女子教育」1に同じ 153頁
5. 永島広紀「緑旗」とその時代—影印復刻版『緑旗／興亜文化』誌の解題に代えて『緑旗1』第1巻第1号 1936年1月 オークラ情報サービス 2009年6月 頁数なし
1933年に緑旗聯盟が結成され、『緑旗』は、同機関誌である。
6. 池田照子「『舞鶴女子高校開校60周年記念式』に参加して」（高知県の高教祖への登校原稿）
7. 4に同じ 154頁
8. 2009年11月17日高橋節子談（電話） 2009年11月18日小坂康子の自宅にて聞き書き
9. 4に同じ
10. 1に同じ
11. 6に同じ 海賊志願は「…小指の先を切って血書歎願という事態に迄至りました。この乙女達の純情に校長はじめ職員一同は家庭が許すならば応じることになりました…内鮮人併せて30名近い生徒が採用されて行く」
12. 1に同じ
13. 津田美代子「舞鶴をとめ出陣—京城舞鶴高女海軍仕奉隊壮行会—」1に同じ 158頁
14. 舞鶴高等女学校学父兄聯盟理事津島武信「真に感激に堪えない」1に同じ 60頁
15. 13に同じ
16. 1に同じ
17. 13に同じ
18. 5に同じ 1934年に京城府に1年制の女子修養機関として清和女塾を組織していた。
19. 小坂康子より2009年11月17日聞き書き 12月17日（電話）小坂康子に聞き書き・2009年11月18日（電話）高橋節子より談経理部のことや軍の機密の仕事、高女の3学期の通信票等について聞き書き
20. 池田照子2009年11月22日聞き書き
21. 19の小坂康子
22. 19の高橋節子
23. 2に同じ
24. 池田照子より2009年11月22日聞き書き
25. 朝鮮年鑑編纂部『昭和20年度朝鮮人名録』復刻版『朝鮮年鑑 全13巻 附録』高麗書林 1992年4月 403頁
26. 初等教育終了後の女子の教育機関は「京城府内女学校以上卒業者状況表」では、京城 府内の各種学校から専門学校まで21校存在しているうち高女10校である。

27. 「官公署」への就職率は、啓花高女は20.7%（111名中23名）、龍谷高女は12.8%（227名卒中29名）であった。
「京城府内女学校以上卒業者状況表（昭和19年3月卒業者）」京城商工会議所調査課杉山茂一『昭和19年4月 京城商工会議所調査資料第八輯ノ二』昭和19年4月
28. 京城舞鶴女子高等学校同窓会『舞鶴六十年史』2000年 784～785頁
29. 田中美智子より2011年5月20日聞き書き
30. 柳宗鎬著白燦訳、太田孝子日本語校訳『かの冬、そして秋 僕の朝鮮戦争』春風社 2010年11月30日 251頁
31. 28に同じ
32. 高橋文子より2011年5月21日聞き書き
33. 28に同じ
34. 32に同じ
35. 金玉圭より2011年1月14日聞き書き
36. 高等女学校研究会プロジェクトチーム「一戦前の女子中等学校の研究—高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料 No.4（外地高等女学校分）」174～181頁
37. 1945年9月8日に「仁川に上陸した米軍は、翌9日にはソウルに進駐し、日本軍および朝鮮総督阿部信行の正式降伏を受理した。ここに日本の統治は完全に終了し、9月10日から、「米軍政がスタートした。」
稲葉嗣雄「韓国における戦中・戦後教育の史的考察（一九三七～）—言語教育を 中心として—」多賀秋五郎編『現代アジア教育研究』多賀出版 1983年 261頁
38. 直井美智子より2009年12月26日聞き書き
39. 田中美智子より池田照子宛2001年2月5日付手紙、2010年2月12日と2011年5月20日聞き書き、2011年9月21日聞き書き（電話）2011年5月14日聞き書き（電話）
40. 38に同じ
41. 36に同じ
42. 市原陽子より2009年11月17日聞き書き 2010年1月9日、2011年9月22日再確認
43. パク・ギチン 許善子訳「卒業生追想『ああ、昔よ!』」『舞鶴第41号』舞鶴女子高等学校 1996年、高等女学校研究会プロジェクトチーム「一戦前の女子中等教育の研究— 高等女学校に関する調査資料 No.7」2000年3月 35頁
44. 呉春煥より2011年1月14日聞き書き
45. 仕奉隊とは「各職域聯盟に於愛国班の名称を隊組による仕奉と改称した」その「狙ひ」は「仕事の能率を挙げる…」
「指導者の熱を望む“仕奉隊の意義” 田中總監談」『朝日新聞 中鮮版』1843年8月5日 坂本悠一監修・編集『大阪朝日新聞外地版 中鮮版』ゆまに書房 2008年 153頁
46. 29に同じ
47. 24に同じ

（受理 平成23年9月26日）

